

三角帽子雑感

萩野脩二

もう 20 年近くも昔のことだろうか、あるいはもっと昔かもしれない。記憶が定かでないけれど、確かフランスから竹内実先生が絵はがきをわざわざ送ってくださった。

その絵が、三角帽子を被った男の絵だったから送ってくださったのである。まあい舞台の上に乗せられた僧侶のような男の頭に、長い三角帽子が被せられていた。竹内先生も、ヨーロッパに、三角帽子を被せる風習があることを知って、私にまで絵はがきを送ってくださったのだ。この絵はがきは大事にしようと、どこかにしまっている。絶対にどこかにあるのだが、今いざという時になると探せないでいる。ドジなことだ。

たまたま、8月22日(2002年)の『毎日新聞』の夕刊を見ていたら、樋口隆康先生が、「残っていたバーミヤーン壁画 急がれる保存と調査」という文章を書いている、その中で、“ただ残念なのは、三角帽子の人面やキルティムカの鬼面などの泥像は、ほとんど盗まれているようだ。”とあった。アフガンにも三角帽子がある。アフガンは東西文化が混じっているそうだから、三角帽子は中国だけでなく、案外、西に起源があるのかもしれない。私は、この“三角帽子の人面”とはどんなものか大いに興をそそられ、次の“キルティムカの鬼面”とともに、なにかよからぬ感じがした。三角帽子は、何かまがまがしき感じがするのではなからうか。

中国では、いつごろからこのような三角帽子を被せるのか？今まであまり気をつけたことはなかった。中国といっても北と南では、また東と西とでは、大いに違うであろう。

たまたま読んだ、容闳の『西学東漸記』に、彼が幼い時、ミッションスクールから逃亡を企てて捕まり、懲罰を受けた時のことが書いてあった。広東からの者が集まった、マカオのミッションスクールでの話で、清末(1835、6年)のことだ。

“次に来たるべきものは懲罰だ。みんな学舎じゅうを引きまわされてから、教室のはしにおかれた細長い机の上に生徒全員の方にむかって立たされた。生徒懲罰のしるしである紙のとんがり帽をかぶせられた私をまん中に左右に女生徒三人ずつが並ばせられたが、私の胸には「逃亡者の親玉」と書いてある大きな紙がピンでとめられた。授業が終わるまで立たされていたのだから、私の一生のうちでこれがもっとも恥ずべき、つらい思いをした経験だ。”(平凡社、東洋文庫 136、百瀬弘訳)

文革中のつるしあげと、まるで同じであることにびっくりするほどだ。もちろんジェット式や殴打などはないが……。ただ、これが中国の風習なのか、ミッションスクールの校長であるギュツラフ夫人（ギュツラフ氏はドイツ人で、奥さんの Mary Newell がイギリス人、とは内田慶市先生のご教授）がおこなった、西洋の風習であるのか。これは大いに興味がある問題だと思う。

遅子建の短編小説「花瓣飯」（『TianLiang』第47号に紹介がある）のお母さんは、1960年代に中国の北の果て黒龍江で、この紙の三角帽子を被らされ、胸に「蘇修特務」と書かれ、町を引き回されたらしい。私の疑問は、こういう懲罰がなぜ当時は、かわいそうではないか、やめろよという声に出会わなかったのか、ということである。こういう発想は直ちにプチブルの軟弱なヒューマニズムだとして批判にあったであろうが、そればかりではなく、こういう批判の形式が土着のものとして定着していたからだと思った。中国の北でも南でも、批判する側もされる側も、当然のように中国の伝統的な風習だから、こういう形態を受け入れたのだと思った。

だが、果たして本当にそうか？私が尋ねた沈国威先生も陳正宏先生も、中国の土着の風習であるとは言わなかった。ソ連から来たのかもかもしれない。或いは、30年代の井冈山時代の共産党の批判闘争でおこなわれていたに違いない、ということであった。ジーナ・ロロブリジダとアンソニー・クイーンが出演した映画「ノートルダムのせむし男」で見たとも言われた。西洋の宗教裁判に関係するようである。

たまたま、尾崎ムゲン先生が2002年10月2日にお亡くなりになり、先生の授業に出たことのある中文の卒業生が、追悼の文を私のゲストブックに書き込んでくれたが、そこでハンス・ペーター・リヒターの『あのころはフリードリヒがいた』という本に出会った。この本の最後の方に、“「中世には、ユダヤ人は黄色のとんがり帽をかぶらされた！」シュナイダーさんがあざけるようにいった。「今度は、黄色の星！——中世に逆もどりだよ！」”（岩波少年文庫、192頁。上田真而子訳）とあった。

そこで私は、ドイツ文学の浜本隆志先生に、失礼を省みず、ごく早い時期のとんがり帽を被っている



図が欲しいとお願ひした。浜本先生は、

図1 13世紀のユダヤ人が被せられたとんがり帽子

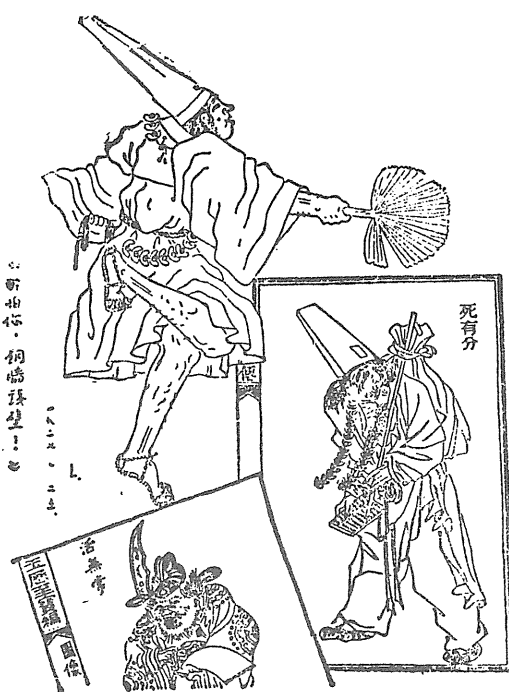
以下のように調べてくださった。

“資料では 1267 年にウィーンでユダヤ人は「とんがり帽子」(Der spitze Hut) をかぶらねばならないという布告が出され、その色はたいいてい黄色か目立つ色とされています。図はその様子を描いたものです。それより以前の 1215 年にはローマの第 4 回ラテラン会議で、「ユダヤ人を独自の身なりによって社会から区別する」決議がなされています。”

私は、やはり三角の帽子は他と区別する印であったことがわかり、大喜びしたが、この図を見た中国の人は、これは三角帽ではないと言う。蓑笠の笠ではないかと言うのだ。

中国で、高い帽子を被っていた像として私の記憶にあるのは、魯迅が描いた「無常」の絵だ。『朝花夕拾』の「無常」および「後記」は、何だか私には込み入っていて、よくわからないのだが、頭に高い三角形の帽子を被っていて、人間界の者ではないことを明示していることははっきりしている。だからと言って、あの世の「鬼」でもないようだ。たとえ人情味があっても、通常の人様とは区別するために、あんなにも高い帽子を被っているのではないだろうか。魯迅がうれしがつて見たという劇中の「無常」は、まさに西洋のピエロのように思える。

「無常」がいつごろから観念された物であるのか、私は知らないが、かなり古くからあったに違いない。が、魯迅がそうであるように殊更帽子に注目されていたわけではなさそうだ。帽子のことは、陳先生の言によって、服飾史を調べようとしたが、沈從文の『中国古代服飾研究』（商務印書館香港分館、1981 年）しか見ていない。その 307 頁の「一〇五・宋雜劇図」に、“高冠子”を被り、大袖の長袍を着た目薬売りが描かれている。この絵は、故宫博物院に収蔵されている 2 枚の「雜劇人物図」の 1 枚だそうだ。左の人物は、帽子や衣服、袋などに目玉をいっぱいつけている。その異常さに目を引かれたのであるが、これは当



時の有名な雜劇「眼藥酸」であったと説明される。 図2 左上が魯迅が描いた「無常」

“雜劇の題名に加えられた「酸」の字は、一般に多く貧乏な知識人を嘲笑した意味を持ち、「眼藥酸」も例外ではない。”（古田・栗城訳、357 頁）私は、なぜ書生のことを「酸」と言うかという、漬物ばかり食っていて酸っぱいからだ、『董解元西廂記』の授業でおし

やった田中謙二先生が偲ばれた。先生も今年11月17日にお亡くなりになった。

沈從文の説明では、近年発見された山西省北部右玉県の宝寧寺の、元人が描いた“九流百家人物”の中に、“也有眼科医生，衣著具眼睛形象的，十分近于写实。”とあって、参考として、その一部の図が載せてある。図には、確かに着物や帽子に目が描かれているが、三角の高い帽子は被っていない。リアルな商人の像には、目はあっても、三角帽子ではないのである。沈從文の説明をたどっていくと、まだまだおもしろいことが出てくるようだが、推測を



図3 左が「眼薬酸」

中に無理に演ぜられる人は、もはやピエロとしての悲しみだけではすまず、生命の危機にまで陥ったのであった。

そういえば、竹内先生から頂いた絵はがきの男も舞台の上に座らされていたではないか。



図4 宝寧寺の元代百工百業図、左から2番目が眼薬売り

急ぐと、どうやら、「眼薬酸」という劇の方は、何の売り物屋でも良かったのであろうが、おどけて見せたり、からかわれたりする人物が必要であったのであろう。衣服に目が付いていれば、私がぎよつとしたように一層特徴があつて、引き立つことになる。そういう人物にこそ、高い帽子を被らせたのではなかろうか。

高い三角帽子は、胡蝶蘭氏が指摘してくれたように、「文革」中では「尖尖帽」と言ったようだ。高い帽子を被った人を舞台の上に乗せて、人々はからかいやおどけを楽しんで観たのであろうが、「文革」